

会員 各位殿

平成28年11月31日

巻頭言

NPOソフトインダストリー研究会
理事長 白石 嘉宏

男女平等ランキングって

世界経済フォーラムでは今年の男女経済格差を数値化し公表した。国会議員における男女比率は世界122位。官民の高位職では113位。男女の専門的技術的労働者の比率101位これらを総合した順位は111位とのことである。お隣の中国は99位、韓国は116位となっている。もちろんG-7では最下位とのことだがこの順位であれば当然だろう。

男女の格差を単純に議員数、役職、専門職という表の世界での人数だけで比べればこのような順位になるのだろう。しかし、これはある一面だけを見て評価したものであり、男女の在り方の望ましい実態を表したものではない。

男女を比較する時にこのように社会での地位で見るとともに、その国の文化慣習、更に本質的な基盤として男女という言葉で分けられている通り私達は生物であり永続的に次代を担う大切な子供を育てるといふ仕事を付託されている。この性差を話題にすると必ず進歩的な人々から非難されることになっている。でも男性は子供を産むことはできない。これは女性でなければできない。

歴史的に男女の性差として一番わかりやすい物差しは参政権の平等がいつからかということだろう。世界初の被選挙権を含む参政権は1894年オーストラリアの南オーストラリア州。日本では1945年幣原内閣に対するマッカーサーの指示により同年12月17日に国政への参加、その翌年9月27日には地方への参政権も実現した。しかし今でも議員数を見れば確かに女性議員の数は少ない。しかし、世界ランキングの物差しを横に置いて別の視点で見れば昔から北政所という文化が日本にはあるように、現在家庭内の地位は女性上位ではないだろうか。銀行振り込みの給与はがっちりと北政所に管理され亭主は鶉飼の鶉となっている。

さらに、平均寿命は女性の方が長いから亭主がこの世を去ってからは全ての資産は北政所のモノとなる。さらにスマホの時代になり誰でも自由に想いを周囲に伝えることができる。

今や国政も都政も保育園づくりを疎かにしては政権は存在が困難になっている。

何を言いたかったかということ 寿命、情報環境の変化、内実の男女の力関係などを見ないで数字で見ることのできる表面での評価はいかがなものか。世界基準グローバルという物差しとは別にローカルの文化があるということ。我が国はやがて卑弥呼の世界になって行く。

SORUCA 通信 contents

- 巻頭言 / 男女平等ランキングって / 白石 嘉宏
- 人生を豊かにする「観るスポーツ」のために / 坂倉海彦
-
-
-
- 「見たことしたこと」 白石回想録—8



人生を豊かにする「観るスポーツ」のために

社会が自由で安定し人々のゆとりが生まれれば様々な形で人生を楽しみ豊かにすることが求められるようになる。当然スポーツもそのための重要な一つになってきている。スポーツには競技という要素とレクリエーションという要素があるが、レクリエーションスポーツが大事な余暇活動であることは度々語られるので、ここでは「観る競技スポーツ」の世界について考えてみよう。

競技スポーツに競技者として参加できるのは、年齢別のカテゴリーのある場合を除き、おおむね若い人々に限られる。しかし「観るスポーツ」と位置付けると年齢に関係なく楽しむことが可能であり、これからの高齢化が進む社会においては、いかにスポーツを観て楽しめるようにできるかの工夫がこれまで以上に人生を豊かにするために重要になるのではないだろうか。特に近年様々な環境の変化が、「観るスポーツ」をより楽しめるようにする追い風になっている。

第一にテレビを中核とする放送技術の進歩、衛星放送の一般化、映像や音声技術の高度化があげられる。今では地球上のどこにいてもハイビジョンでのスポーツ競技を同時に見られるのが当たり前になってきたがこれは1964年の東京オリンピック当時には想像もできないことであった。

第二にスポーツ全体がアマチュアリズムの殻を抜け出して、競技力の高度化やエンタテインメント性の向上が図られてきた。ここにはメディアがスポーツに大いに関与するようになってきたことの影響も大きい。

この二つの動きはより高度のエキサイティングな競技を、居ながらにして美しい画像と優れた音声で楽しめるようになったことを意味する。

そして第三の動きが地域密着型のスポーツチームが競い合う仕組みが様々なスポーツでできるようになってきたことがあげられる。アメリカのプロスポーツやヨーロッパのサッカーはこのような地域の支えがあって成り立っているが、日本でもようやくその動きが出てきたのであるが、高校野球の人気の衰えないどころかますます盛り上がっていることを考えると、地域とスポーツの結びつきというのは本質的に強いのであろう。これによりスポーツを身近に感じたり、地域のチームを応援するために競技場に足を運ぶ機会が増えてきた。

この夏から秋にかけてリオオリンピック、甲子園、プロ野球の日本シリーズ、メジャーリーグのポストシーズンなどをいつもの年よりしっかりテレビで見ることになったが、そこで「観るスポーツ」という側からの日本の問題点が多いことに改めて気づかされた。次に筆者が感じた問題について指摘させていただくことにする。

まずリオオリンピックであるが南米初のオリンピック開催都市に選ばれ、本当にしっかり開催できるのかを案ずる声があったのも事実である。もちろん細かい問題はたくさんあったのであろうがテレビで視聴する限りにおいてはブラジルの文化を美しく伝え非常に楽しめる大会であったように思う。またIOCの委員の一人の方のこだわりと努力で実現したとされる祖国を持たない難民選手団が結成されていたことには感動すら覚えた。オリンピックは競技の頂点であると同時に非常に貴重な平和運動でもある。おそらく多くの世界の視聴者が難民選手団には拍手を惜しまなかったのではないだろうか。2020年の東京大会に向けて準備や開催計画の杜撰さが発覚し、主として金の問題でもめているが関係者は東京での開催をどうとらえているのであろうか。1964年の時はきちんと開催できれば十分だったのであろうが、2020年はアジアで初めて先進国になった日本が東京でどのような大会を見せてくれるかを楽しみにしてるはずである。今国内では今度の東京大会がそのような世界的な関心に対して何を訴えるかのメッセージや理念など何も議論していないように見える。「オモテナシ」と「震災からの復興」だけではあまりに寂しすぎる。もちろんこれらは重要なテーマではあるが。

次にベースボールに話を移そう。MLBではかつて金持ち球団と貧乏球団との戦力格差が大きく魅力に乏しかったが、それを解消するためのドラフト制度で戦力が均衡し面白くなって人気が高まったという。現在も下位球団が有力新人をとる優先権を得るこの仕組みを継続している。日本でもドラフト制度を導入したが、いつの間にか下位球団から順に籤を引く制度になり戦力均衡のための機能を失っている。MLBでは地区ごとの1位のチームを2位以下の全チームの中の最高勝率の2チームがポストシーズンに進む制度であるが、これが機能しシーズン終盤からポストシーズンに向けた戦いが本当に面白くなる。日本のプロ野球もクライマックスシリーズ制度を導入したが、3位までのチームが争い日本シリーズに進出する仕組みなので、下手をするとシーズン中に負け越したチームが日本シリーズに出て日本一になる可能制もあるという不合理なやり方だ。パシフィックリーグがフランチャイズ制を導入し、札幌、仙台、千葉、埼玉、大阪、福岡を拠点とする

チームに再編成して人気が出てきたのは一つの進歩だが、プロ野球の全体システムをしっかりと見直し、MLBに負けない「観て面白い日本の〈あるいはアジアの〉プロ野球」に様変わりしてほしいものだ。

あまりテーマになることのない「観るスポーツ」という視点で考えてみたが、予想以上に奥行きが深くしかも高齢社会化する国では重要な役割を果たしそうな事がわかってきた。しかも日本では様々な「観るスポーツ」やスポーツのとらえ方での遅れや、不十分な制度設計がありそうな事にも気づかされた。今後もスポーツというテーマをより広角に見て考え方を深めていきたいと思う。 （坂倉海彦）

空き家と住宅の変化

お金、清潔な暮らし、持ち物を見ましたので次は家です。
普通家は狭くなったからとか古くなったから建て替えると思いがちですがこれからは違って来るでしょう。

今までの見てきた通り欲しいモノはほぼ行き渡っています。ですから今を基準とすればこれからはほとんど全ての市場が縮小してゆくと思われます。
その判断の元は高齢化、人口減少が続いていますが、さらに 2019 年には世帯数も減少に転じるからです。世帯が減るということは家も、その家に対する設備・用具も、さらに家の中に置くテレビや冷蔵庫のような耐久消費財も世帯数の減少と平行に少なくなっていくからです。

「住宅総数、空き家数及び空き家率の推移」のグラフです。

世帯数は増えていたのですが、それでも空き家は増え続けています。2 年前の平成 25 年時点で空き家率が 13.5%になっています。住宅総数は増え続けているからこれからはさらに加速する可能性があります。

日本では欧米のように家の手入れをしながら住み続けるということより年式が変わり新しい性能の車が出てくるとそれまでの車を手放し新車を買うように、断熱性能、ソーラー発電、水素ガス発電、床暖房など機能が向上した住宅を、また、高齢化に伴い交通の利便性がさらに良いところへ、戸建てのように手入れを自分でなくて済む集合住宅へ、同様にバリアフリーなど身体への負担が少ない家を求めるようになっていきます。

「見たことしたこと」白石回想録—8

いよいよ私たちの出国の時が来ました。メンバーは4人。団長の中央大学の田中さん、早稲田の堀口さん、神戸大学の山本さんと私です。出航は横浜の高島棧橋です、ここは貨物船の船着き場です。余談ですが西の神戸は山口組、東の横浜は藤木組が荷役を行っていたのです。船は日之出汽船の春日丸という12,000トンほどの蒸気船です。現在船はディーゼルがほとんどですが蒸気船はタービンの力をスクリューに伝える構造ですから音もなく静かです。船長は小島明さん。出航は1961年6月24日の17時です。横浜に行く前東京農大と早稲田大学が東京駅で大根踊りの見送りをしてくれました。嬉しいよりも恥ずかしさで一杯でした。

学校からは剣道部の主将の久能さん他多くの先輩友人の見送りを受けました。紙テープが船の上の私たちと見送ってくださった方々を結び、船が棧橋を離れて行くに従い次々と切れて風に漂いました。出航渡航という気持ちが嫌でも感じられます。船はこの後高知県の須崎によりパージ（四角い弁当箱のような型の荷物を積むだけの用途の船、陸で言えばトレーラーのコンテナのようなもの）を船についている120トンクレーンで甲板に積み上げました。このパージはフィリピンへの賠償だと聞きました。

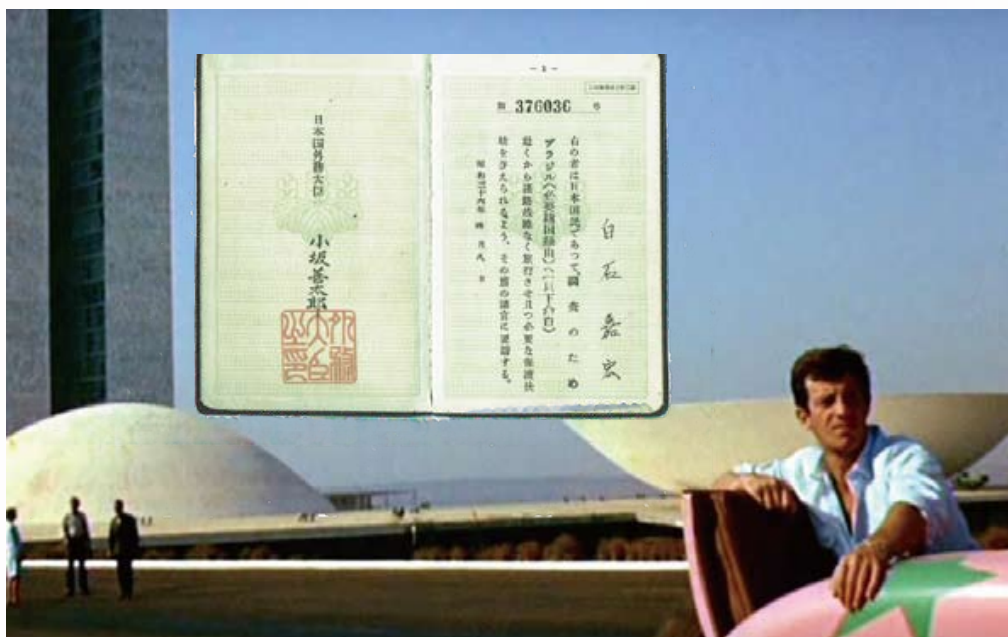
船の航海速度は12ノット（時速21キロ）です。のんびり静かな船旅と思っていたら大間違い。台風の発生シーズンに入りお天気でも大きなうねりに船は翻弄されました。船首が波に飲み込まれるかと思うと次は船尾が沈み込み船首方向には空しか見えなくなります。そんな航海がフィリピンまで続きました。船に乗って感動したのは天気の良い夜空です。これほどの星があったのかと思うほど、空は星で一杯。昔の航海は夜の星が目印というのが良くわかりました。うねりが大きく被った波は乾くと綺麗な塩の結晶になります。出国間際にブラジル語4週間という本を買いました。泥縄とは言え簡単な会話程度はとっていましたが毎晩宴会です。船長、機関長、事務長、一等航海士、とドクターと私達4人。当時日本では2600円ぐらいのジョニーウオーカーの赤ラベルが600円で買うことが出来ました。おかげでブラジルに着くまでに本の出だしだけ目をとりましたが、そこから先には進みませんでした。航海中バシー海峡に差し掛かると船長は花束と一升瓶を持ち正装でブリッジに立ちました。黙禱の後花束を海に、そうして一升瓶を開けてお酒を海に注ぎました。小島船長は戦争中ここでアメリカからの攻撃を受け何度か沈没した経験を持っていたからです。魚雷が当たった瞬間乗っている兵隊たちの凄まじい叫び声、航空機からの機銃掃射は鉄板の天井や壁を貫きその弾が床を走り回りリノリウムの床がその摩擦熱で燃え上がるという話など、そのあとで聞きました。

船長はこの海峡を通る時は必ず戦没した人たちに対してその霊を慰める祈りを捧げているとのことでした。

フィリピンはマニラに寄港、ここでバージを降ろしシンガポール、ケープタウンを経て8月13日リオデジャネイロの北のビトリアに着きました。日本を出てから51日。ビトリアは日本が協力して開発を進めているウジミナス製鉄所の玄関口になっていました。ここからバスでリオデジャネイロに向かいました。リオでは三井物産の支店を訪ね到着の挨拶をしました。養父が三井物産の常務の瀬下さんに私への支援をお願いしてくれていたからです。当時のリオは映画で観た黒いオルフェの風景です。どうしてこんなに美しい風景なのかと感動。2日後目的地のサンパウロにバスで向かいました。8月17日サンパウロに着きました。

ここから先は日程順に書いてゆくと大変な文字量になるので極力短縮。当時のブラジルと私の歩いたことを伝えることにします。

以下は私のパスポートです。未成年で調査のためというパスポートをもらったのは私が初めてでしょう。当時のパスポートは大きくて黒い革製です



長谷川毅のパスポート
1964年4月20日 Masayoshi Ohira

※ 前号で名前の出ている方々はネットで検索していただくだけでいただけます。

< 編集後記 >

全一学を唱えた哲学者、森信三は「自伝は人生の卒業論文である」と言っている。70歳にして『全集』25巻の出版刊行に着手している。「自伝」はその人にとっては一種の報恩録となる。ちょうど70歳は卒業と新たな旅立ちへの心の準備に入る時なのでしょう。

(渡辺 勝範)

SORUCA のホームページの画面です。 <http://sorca.p2.weblife.me/>



「特定非営利活動法人ソフトインダストリー研究会」広報誌
SORUCA 通信 (2016年冬号)

発行責任者 白石 嘉宏
発行所 NPO ソフトインダストリー研究会
東京都新宿区矢来町 47 番地
TEL: 03-3266-1769
FAX: 03-3266-1764

<http://sorca.p2.weblife.me/>
編集人 渡辺 勝範・長谷川 毅
発行日 2016年11月30日



発行元 :NPO ソフトインダストリー研究会